

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 中国西安西方における玄奘取経の道程に関する地理学的研究-CORONA衛星写真の判読と現地踏査を基に-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安田,順恵, 相馬,秀廣, 戸祭,由美夫, 出田,和久, 高田,将志, 上野,邦一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1678

氏名(本籍)	安田順恵 (奈良県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博課第283号
学位授与年月日	平成17年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	中国西安西方における玄奘取經の道程に関する地理学的研究 —CORONA 衛星写真の判読と現地踏査を基に—
論文審査委員	(委員長) 教授 相馬秀廣 教授 戸祭由美夫 教授 出田和久 助教授 高田将志 教授 上野邦一

論文内容の要旨

『西遊記』などで有名な唐代の中国僧、玄奘三蔵がインドへ取教の旅を行ったことは、一般によく知られている。しかし、その取教ルートについては、必ずしも十分に検討されていない。とりわけ当時の都長安—西域間のルートについては、いわば密出国であった往路に対して、当時の皇帝に大歓迎された復路は、唐代の主要な交通路を通過した可能性が高いものの、具体的なルートについては未解明である。本論文は、唐代主要交通路復原という意図のもとに、高解像の CORONA 衛星写真の判読を中心として、現地調査、文献調査を加えて、歴史地理学的手法により、蘭州付近の黄河からその支流渭河にかけての地域を対象として、玄奘三蔵取教の帰途のルートについて検討したものである。

第一章では、本論文の研究目的、先行研究の概略、本論文の研究手法および構成が示されている。先行研究では、玄奘のインド取經ルート、中国および日本における唐代を中心とした交通路などに関する研究を概観するとともに問題点を指摘し、それらを踏まえて、本論文で用いる研究手法と構成について述べている。

第二章では、研究対象地域と研究方法について述べている。特に、最大地上解像度約 3 m の CORONA 衛星写真を利用した立体視判読、同写真のデジタル画像化とその画像処理、および現地調査などを通して、交通路を検討する上で重要な指標である城郭・囲郭の分布を、遺跡化したものを含めて把握する方法を採用している。併せて、唐代における当時の政治的・軍事的に不安定な状況を考慮し、甕城・馬面・羊馬城などの防禦的付属建築物の有無についても検討している。

第三章では、CORONA 衛星写真の判読による囲郭の抽出と分析に関する有効性について、唐代蕭關新城を事例としてその歴史的意義と役割とともに、検討している。現地調査結果も加味して、文献史料を基に従来指摘されてきた「李旺堡」とは位置が異なる、「紅故城」と「草場故城」が候補となること、後二者について発掘調査などにより具体的に確認する必要があることなどを指摘した。併せて、CORONA 衛星写真の判読により囲郭を抽出することは有効であり、多くの囲郭の存在を確認しそれらを繋ぐルートを想定することにより、かつての交通路が抽出される可能性が高いことを指摘している。

第四章では、CORONA 衛星写真判読を基に、西安西方における囲郭の形態と規模について検討している。本研究では、CORONA 衛星写真のフィルム上で約30mを単位として計測が可能なることから、一辺が120mを超えるものを囲郭と定め、抽出された112個の囲郭を平面形により6つに分類した。そのうち最も単純な形態である「正方形」と「長方形」を合わせると全体の3/4を占め、また、両者の割合は2:1で、「長方形」は河岸段丘面の幅が狭い場合に設置される傾向があること、さらに、古来中国の囲郭で最も典型的とされる「正方形」の形態が対象地域全体でも優位を占めることなどを指摘している。

囲郭の規模については、囲壁の長さは、300m前後と600m前後のものが多く、必ずしも唐代とは限定できないものの建設の基準となる「尺」をもっていたと推察されること、さらに数は減少するものの660m台を超える囲郭があり、それらには地域行政の中心地「唐代州治所」が含まれていることなどから、それぞれの地域における中心的な存在であった可能性が高いことなどを指摘している。

第五章では、まず囲郭の分布状況について、囲郭の連続性・近接性とそれらが分布する河川規模などの関係に着目して、大きな河川・幅広い河岸段丘面に分布するもの、前者の支流などの河岸段丘面に分布するもの、それ以外の丘陵や山地斜面に分布するものに囲郭を大別し、さらに河川ごとなどにグループ分けできることを指摘している。

次いで、上記グループ分けを基礎として、それらの境界となっていることが多い「峠」や「渡し」などの地形的状況、「唐代州治所」などの地域の中心的囲郭の存在、さらに、県や郡の境界付近で小規模な囲郭がほぼ等間隔に分布する「駅亭制」の可能性なども勘案して、6本の交通路（ルート）を想定している。さらに、それらが、境界となる地形条件の厳しさや「駅亭制」の可能性を有する囲郭群の有無なども考慮すると、他地域へ連続する「広域交通路」と地域内で終わる「地域内交通路」に区分されることを指摘している。さらに、先行研究による唐代交通路と比較・検討した結果、先行研究で指摘されているルートには、一部において通行がかなり厳しい部分が含まれていることを明らかにしている。

第六章では、第五章の成果を踏まえ、さらに、玄奘取経の旅当時における当該地域の政治的・軍事的状況、すなわち、一般に考えられがちな「安定した唐政権」ではなく、常に北方やチベット高原側

からの脅威に曝されていた状況などを考慮して、帰途に利用された可能性が高いルートとして、従来言及されていない交通路である、瓦亭から六盤山脈を越えて祖励河沿いに靖遠に至る「靖遠ルート」を指摘している。

最後に、本研究は基本的にはいわば「衛星」から観たものであり、考古学的証拠が極めて不十分であることから、今後、その成果が蓄積された段階でさらに詳しく検討されるべきであるとして、その課題について言及している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、西安西方、いわばシルクロードの東玄関地域における、玄奘三蔵インド取経からの帰途ルートの解明を目指したものである。これまで本格的な研究がほとんどみられなかったものの、密出国であった往路に対して、皇帝による盛大な迎えを受けた帰途のルートは、当該地域における当時の交通路を考える上で重要な意義をもっていたと考えられる。しかし、海外の、しかも約300km×400kmの広大な地域が対象となる点で研究上の困難が伴う。本論文提出者は、1995年に公開された最大地上解像度約3m、立体視判読が可能な、1960年代半ばに撮影されたCORONA衛星写真を利用している。CORONA衛星写真は解像度が高いのみでなく、1シーンが約17km×230kmの広大な範囲をカバーしていることから、いわば、いわばミクロスケールからマクロスケールまでの地上景観に関する情報を提供するものである。しかも、撮影当時、交通路を検討する上で基礎となる「囲郭」が比較的良好に残存していたことから、テーマの設定に対して、CORONA衛星写真を基本的な研究素材として用いる研究手法は適切であると評価される。さらに、中国、日本はもとより海外においても、かつての交通路を復原する際にこのような研究手法を用いた例はほとんどみられず、大いに注目される。

第一章では、研究の目的とテーマ、当該地域の交通路に関わる中国および日本における研究史、研究手法と論文構成が示されている。研究史について年代順に概観した上で問題点を抽出しており、日本における東洋学の成果が十分に要約されているとはいいがたい面はあるものの、中国での最新の研究にも目を配っている点で評価できる。

第二章では、研究対象地域と研究手法について述べている。囲郭に加えて、甕城・馬面・羊馬城などの防禦的付属建築物に着目したCORONA衛星写真の判読がなされており、その結果を、文献史料も参考にして現地調査で確認する方法は妥当である。とりわけ、上記の防禦的付属建築物の有無は、当時の政治的・軍事的に不安定な状況を考慮すれば重要である。外国人による中国の空中写真の利用が極めて困難な状況の下、従来わが国で利用されてきた衛星画像では価格あるいは解像度の制約から、このような防禦的付属建築物の抽出は不可能であったが、高い地上解像度を有するCORONA衛星写真の利用によりはじめて可能となった。この着眼点は高く評価される。

第三章では、CORONA衛星写真の判読による囲郭の抽出と分析に関する有効性について、唐代蕭關新城を事例としてその歴史的意義と役割とともに、検討している。CORONA衛星写真による上記防禦的付属建築物を含めた囲郭のミクロな判読に加え、やや広い範囲の判読を基礎として、文献史料・現地調査の結果を踏まえて、従来とは異なる2ヶ所の囲郭を唐代蕭關新城の候補地として提示している。防禦的付属建築物を含めた囲郭の抽出が、CORONA衛星写真により可能なことが、鮮明な

画像や実体視可能な画像の提示などを通して明確に示されている。また、提示された候補地も、考古学的データが欠如している現状では、妥当と判断される。

第四章では、CORONA 衛星写真判読により抽出された、西安西方における囲郭の形態と規模について述べている。16倍のレンズを用いて、対象範囲のいわば「悉皆調査」により、「囲郭」として112個を抽出し、さらに約30mを基本単位として、平面形態、囲壁長、防禦的付属建築物の有無などの諸要素をまとめている。CORONA 衛星写真判読に関わった審査員の経験から、対象範囲の囲郭抽出、さらにそれらの諸要素のとりまとめに要した膨大な作業をまず評価したい。また、形態的には「正方形」囲郭が多く、一辺の囲壁長分布のピークが約300mおよび約600m付近に出現したことは、中国における古来の囲郭建築の基本的規模との関わりから、今回の作業が妥当であること示したものと評価される。また、文献史料による「唐代州治所」などを参考に、一辺の囲壁長が約660mを越える囲郭は、囲郭形態によらず、地域の中心的であった可能性を導いている。660mという囲壁長の規模のもつ意味について説得力ある考察・意義付けがなされていない点や、考古学的データが欠如しているために厳密には各囲郭の時代が特定できない点など、問題が残されてはいるものの、交通路を復原する上で重要かつ示唆に富む事実が明らかにされたと評価できる。

第五章では、立地する地形および近接性などに着目して囲郭分布を6グループに分け、次いで、この6グループを基礎として、峠や渡しの地形的状況、中心的囲郭の存在、さらに、「駅亭制」有無の可能性などを考慮して、6本の交通路を設定している。古代交通路における地形的障害の大きさに関する認識については、若干問題が残るものの、設定された交通路はおおむね妥当と判断される。とりわけその中に、従来、唐代交通路として認識されていないルートが含まれていること、反対に従来唐代交通路とされてきたルートには地形的に通行が大変厳しい区間がふくまれていることなどの指摘は、いずれも本研究の大きな成果と評価される。また、いわばシルクロードの一部をなす「広域交通路」と地域内で完結する「地域内交通路」の分類は、CORONA 衛星写真の特性を生かした見解であり、大変興味深い。

第六章では、玄奘の帰途について、第五章で指摘した「広域交通路」の中から、当時の当該地域が政治的・軍事的には決して安定した政権ではなかったことを重視して、従来言及されていないルートを最大の候補として提案するとともに、今後、考古学調査による成果を踏まえて再検討されることを主な課題としている。

以上、本論文は、高解像度のCORONA 衛星写真の詳細な判読による、防禦的付属建築物を含めた囲郭の抽出を基礎として、それら囲郭の近接性・連続性、地形的状況、および文献史料などの成果に基づいて、唐代交通路を復原するとともに、玄奘三蔵長安への帰途のルートについて論じている。得られた交通路に関する見解とともに、本論文の研究手法は、広大な面積を有する中国における、かつての交通路復原の研究に対して極めて重要な影響を与えるものとして、高く評価される。また、本

論文が人文社会科学と自然科学とにまたがる複合的かつ融合的な研究内容・手法を有している点で、本複合領域科学専攻に極めて相応しいものといえる。

本研究は「旅の文化研究所」により研究奨励に採用されたもので、その成果の一部は既に全国規模の学会誌に発表されている。

以上の諸点から、本論文は奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するに値する、十分な内容を備えているものと判断される。